

## 南洋群島に生きた沖縄の人びとの植民地経験 —境界から帝国の忘却／否認を問う—

森垣紀子

本研究の目的は、帝国日本が第一次世界大戦以後からアジア・太平洋戦争終結まで支配下においた「南洋群島」（赤道以北のミクロネシア）における沖縄の人びとの植民地経験とはどのようなものであったかを描き出し、境界から帝国の忘却／否認を問うことである。

南洋群島は、日本本土に次いで戦前沖縄から最も多くの人々が移民した地域であった。それにもかかわらず、日本本土ではもちろんのこと、沖縄においても南洋群島は忘却の淵にある。理由は二つある。一つは、戦後日本が、それ以前の帝国化の過程で勢力圏・占領下に置いた地域—アイヌモシリ（北海道・樺太・千島）、琉球列島、小笠原諸島、台湾、朝鮮、南洋群島、満洲、東南アジア—に対する支配・加害の歴史を否認し続けていることである。もう一つは、日本および沖縄社会の多くの人びとにとって、ミクロネシアを含む太平洋の島々は、中国・台湾・韓国などの東アジアや、同じアジア県内にある東南アジアに比べてなじみがなく、日本軍が「玉砕」した場所か、ハワイより「手頃」なりリゾート地以上の場所ではないことである。つまり、日本社会は長らく植民地・占領地への支配・加害の歴史を否認し続けてきたが、なかでもアジア圏外の南洋群島（ミクロネシア）に対してはそもそも場所そのものに対する関心がなく、結果として沖縄から南洋群島へ渡った人びとの歴史も忘却してきた。ごく一部の戦争体験者やライターは、南洋群島における「日本人」の戦争体験（＝被害体験）に関しては繰り返し問い続けてきたが、そうした人びとであっても、戦争以前の「植民地経験」に関しては主題とせず、むしろ「楽園」と表象することさえあったのである。

本研究が沖縄から南洋群島に渡った人びとの植民地経験を明らかにするのは、こうした日本本土社会の在り方を批判的に乗り越え、アジアのみならず、沖縄、さらにはミクロネシアの人びととの関係性を新たに築き直すためである。沖縄から南洋群島へ移民した人びとに関しては、1990年前後から同様の問題意識による先駆的研究が積み重ねられてきたが、それらはいずれも南洋群島における沖縄出身者を「男性肉体労働者」としてステレオタイプ化する傾向があった。そこで本研究では、南洋群島における沖縄移民の「社会」の総体を植民地経験という観点から明らかにすることを具体的課題とし、2006年から2015年にかけて沖縄に居住する南洋群島引揚者152名に聞き取り調査を行うとともに、東京・沖縄・京都で南洋群島および近代沖縄に関する文書史料を収集し、それらを突き合わせつつ解読した。そして、南洋群島における沖縄出身移民の社会総体を射程に収めるための枠組み「4つの世代論」—「開拓世代」「戦時労働世代」「南洋教育世代」「戦場の子ども世代」を念頭に置くこと—を提起し、以下五章を組み立てた。

第一章では、日本の南洋群島支配の初期において半官半民の南洋興発(株)が北マリアナ諸島で行った製糖業の構築過程を、トランスパシフィック・スタディーズの観点から明らかに

した。南洋興発の製糖業を明らかにした従来の先行研究では、南洋興発の経営方針や南洋庁の政策的支援が重視されてきた。しかし、本研究では、それら以外にも、スペイン・ドイツの先住民政策、アメリカ・台湾における近代糖業の興隆、沖縄出身労働者―開拓世代―との緊張関係という複数の要素が影響を与えていたことを明らかにし、支配者・被支配者双方のグローバルな広がりと同層性を視野に入れる必要性を指摘した。

第二章では、北マリアナ諸島（主にサイパン・テニアン）の南洋興発(株)の甘蔗農場において初期から中核を占め続けた甘蔗小作人―開拓世代―の出身地沖縄本島中部旧美里村石川集落に焦点を当て、石川集落のある農家から南洋移民が送出されていくプロセスと、サイパン・テニアンにおける石川出身小作人の生活世界を解明した。この章は、本研究の中でも最も苦戦した章である。というのも、本章が主に光を当てた 1920 年代～1930 年代半ばの時期は、沖縄・南洋群島いずれも文書史料がほとんど残存していない時期だからである。そのような中で鍵となったのは、京都大学農学部生物資源経済学専攻所蔵の農家経済調査簿であった。この調査簿の中に含まれていた、南洋移民を送出した石川集落のある農家の家計簿との出会いがきっかけとなり、アナル派のアラン・コルバン『記録を残さなかった男の歴史』のように、自らはほとんど記録を残さなかった開拓世代の歩みを、開拓世代が見ていただろう風景、同時代の社会変動、前後の世代の経験から想像しつつ叙述した。

先の二章では 1920 年代に南洋群島に入植した「開拓世代」の経験を検討したのに対し、第三章では、その子として南洋群島で育った「南洋教育世代」に光を当て、この世代が初等中等教育を受けるにしたがって「帝国の日本人」としての意識を内面化し、親世代や朝鮮人、現地住民を他者化するのみならず、自らの沖縄性も抑圧していったことを明らかにした。また、「沖縄出身者＝男性肉体労働者」という前提で進められてきた先行研究において不可視化されていた「子ども」こそ、＜南洋群島＞という植民地空間の形成を理解するうえで欠かせない存在であったと指摘した。沖縄出身南洋教育世代の成長過程には、この世代自身の歩みや夢のみならず、大和人官吏や教師、沖縄人有力者、沖縄出身開拓世代の思惑が複雑に絡み合っていたからである。

第四章では、1930 年代後半以降の総力戦体制下において南洋群島全域で繰り広げられた熱帯資源開発と要塞化の過程を明らかにする共に、このプロセスの中で、沖縄の人びとが再び、「熱帯に耐えうる労働力＝沖縄人」として人種化されていったことを明らかにした。

第五章では、総力戦体制期に東南アジアへの「南進」拠点として一気に開発が進められたパラオ諸島へ渡り、大工となった「戦時労働世代」のある青年とその家族のライフヒストリーを重ね合わせていくことにより、沖縄の人びとにとって南洋群島での経験とは何だったのかを引き揚げ後の経験も含めて検討した。

以上のように本研究では、トランスパシフィック・スタディーズ、アナル派の社会史、ポストコロニアル理論、オーソドックスな実証史学、ライフヒストリーなど複数の方法論を用いることにより、南洋群島に生きた沖縄の人びとの植民地経験を歴史として叙述し、日本社会が記憶の淵の追いやってきた場所から帝国を問い直す方途を提起した。